

との相関は見られなかった。

29. ダウン症児の感覚運動発達の特徴—クラスター分析による考察—

大阪府立大社会福祉学部 安藤 忠

ダウン症児の感覚運動発達の特徴を、クラスター分析により評価し、次の結果を得た。

21トリソミー303名(172名:男児, 131名:女児)の180項目における分析結果では、全項目は33のクラスターに分類されたが、類似度5では以下の6クラスターに分類され、これが内容的に最も妥当であると考えられる。

1) 0~4カ月群

2) 5~7カ月群

3) 8~12カ月群

4) 13~24カ月群

4-a: 立位運動および二語連鎖群

4-b: 巧緻運動群、社会性群

4-c: 言語理解群、視覚探索群

これよりダウン症児発達の特徴として、立位運動群の遅滞と独立性、および二語連鎖群の遅滞と独立性が明らかとなった。

答 安藤 忠: ①ダウン症児の標準的グループの示した結果です。あえて、このグループは再分化はいたしませんでした。②正常発達を示すといわれる子供達について、調査をやりたいと思ってもいます。

30. 新生児行動評価(NBAS)と縦断的発達評価

—0歳から5歳まで—

長崎大医療技術短大部

穂山富太郎 川崎 千里 後藤ヨシ子

鶴崎 俊哉 大島 吉英

長崎県立整肢療育園

川口 幸義 山口 和正 二宮 義和

中村 隆幸 末広 昌嗣

障害児の早期評価と早期療育をより確実なものとするために、コントロールとして正常新生児に対する縦断的発達評価研究を実施した。

【対象ならびに方法】 対象児は合併症のない成熟児

21名であった。日齢1, 3, 7, 14の計4回、Brazelton新生児行動評価を行った。6ヶ月、1歳、2歳時の発達評価は Bayley 法、3歳、5歳時の発達評価は McCarthy 法を実施した。併せて、生活環境調査も行った。

【結果ならびに考察】 NBAS 検査項目を7群に分類した。生後7日目の結果は、1) 側面現象 7.26 ± 0.97 , 2) 聴覚刺激への定位反応 6.43 ± 1.10 , 3) 運動行動 5.12 ± 0.86 , 4) 状態の変化性 3.20 ± 1.17 , 5) 状態の調節能力 5.37 ± 1.01 , 6) 自律系の安定性 5.97 ± 1.14 , 7) 反射 1.05 ± 1.32 であった。生後6ヶ月時の精神および運動発達は全例標準的発達を示しており、Bayley検査のDQは精神 99.3 ± 9.5 , 運動 101.0 ± 4.9 であった。5歳時の McCarthy 検査による IQ は 96.1 ± 16.2 で、運動発達偏差値(標準値=50)は 50.3 ± 8.1 であった。これら正常児群では、調査時の生活リズムを含めた育児環境が、精神、運動発達に影響が大きかった。新生児行動と長期的発達予後との関連は、数項目で単発的に相関関係を認めたが、大半で関係を認めなかった。

同時に研究調査したハイ・リスク児では、諸行動に低得点値を示した。なかでもストレス徵候が反映されやすい補足項目や反射項目で異常値を示すもの多かった。

答 穂山富太郎: ①今回は正常新生児の標準的行動能力を知るために研究した。②新生児行動評価は決して難しくなく、検者間の certification を得ることもできる。

31. 失調型脳性麻痺の訓練効果に関する検討

富山県立高志学園

宮森加甫子 太田 和秀 糸川 秀人

大橋 光伸

【目的】 失調型脳性麻痺の歩行分析を行い、歩行能力の評価および治療効果の判定法として妥当かどうか検討した。

【対象と方法】 対象は、失調型脳性麻痺6名で、測定開始時年齢は2~5歳(平均3.5歳)、ボバースアプローチで訓練を継続してきた結果、歩行の安定性が得られている。なお、2~5歳まで各年齢層5名ずつを正常コントロールとして用いた。測定は大型床反力計を用い、床反力、足圧中心、体重心軌跡を、2カ月ご